日本胃カメラ学会北海道地方会第1回例会

於・北　海　道　大　学
昭和34年10月18日

1．胃癌診断に於ける胃カメラ，胃細胞診，X線診断の
併用意義について
北海道中央病院内科　永倉民部，田中英二

2．胃カメラと手術所見
市立小樽市民病院
菅野二郎，長谷川正義，近藤修
岩城豪男，村山　靖紀，桜井彪

3．胃カメラ所見と胃液分泌能
札幌医科大学和田内科
佐藤勝巳，村山章史，工藤雅之

4．慢性胃炎及び胃潰瘍に対するAzunolの治療効果
主としてガストロカメラによる経過の観察――
北大第3内科　並木正義，寺田秀夫，前鼻三雄
坂野輝夫，山寺泰彦，柴田祐次

1. 胃癌診断に於ける胃カメラ，胃細胞診，X線診断の併用意義について

北海道中央病院内科
永倉民郎　田中英二

私達は今年8月16日から，入院，外来共に胃疾患のルーチンな診断法としてX線診断，胃液検査に胃カメラ，胃細胞診を繁用，今日迄約2ケ月間に数十例を経験した。現状では胃癌，胃潰瘍の発生部位によって，それぞれ能力に差がみられるが，これは三者の協力によってより高い早期診断率の確保が期待されることを示している。

三者の併用意義を考察するために三症例を挙げ個々の所見より三者の綜合で到達する所見が常により確実であることを，胃切除標本及び病理組織標本により裏づけられたことを示した。

第一例は48才の農家の主婦で殆んど愁訴がなかったが急性胃炎を動機として来院，X線検査で前庭大彎部の硬化像を，胃カメラでボールマンII型の像を，胃細胞診で癌と決定した。

第二例は56才の農夫で稼動時の背痛を訴えて来院したものであるが，X線上小彎上部後壁の穿孔性潰瘍像が見られたが，胃カメラにより定型的粘膜集中像と辺縁清浄な円形潰瘍を，細胞診では慢性萎縮性胃炎と良性異型細胞を証明した，胃切除により膵尾部との癒着あり，その部に硬結があったが割面擦過塗抹標本により良性なることを証明した。

第三例は54才の農婦で18ケ月前胃ポリープ癌で切除をうけている患者であるが，上腹部重圧感を主訴として来院せるものである。

X線上胃腸吻合部下方に拇指頭大の硬結と腸側の蠕動抑制を見るのみで術後癒着か悪性のものか区別つかず，胃カメラにより腸壁正常なること，吻合部胃側小彎部の悪性浸潤が疑われたもので，術後病理組織学的にこれが証明された。X線上触れた硬結は腸外側に密着した拇指頭大の淋巴腺転移であった。

2. 胃カメラと手術所見

市立小樽市民病院
菅野　二郎　長谷川正義　近藤　修
岩城　豪男　村山　靖紀　桜井　彪

今年4月来，当院に於て約350例の胃カメラ撮影を行ったが，今回，此の中，胃切除を行った症例の一部について，その胃カメラ所見と切除標本を対比し，若干の考察を試みた。

症例は，レ線上所見陰性であったものに胃カメラを行って癌を発見し，早期手術を行ったもの二例，レ線上所見陰性であって胃カメラに依り潰瘍を捉えたもの二例，レ線上良性潰瘍と判断し，胃カメラによって悪性化を知り得たもの一例，レ線上癌化を疑った潰瘍が胃カメラ所見によって良性と判定した二例である。

胃カメラは，病巣の発見，悪性度の判定などに有力な診断法であるが，手技，病巣の位置その他種々の条件によって，時には明瞭なニッシェすらも把握出来ない場合があるのであって，即ち胃疾患の診断に当っては，レ線所見，細胞診又は生化学的診断法等と総て共に用いられなければならない。そして胃カメラ撮影が此の様に容易に実施し得る段階に到った今日，胃カメラ撮影を胃液検査の如く胃疾患の基礎的検査として常用して良いのではないかと思われる。

3. 胃カメラ所見と胃液分泌能

札幌医科大学内科学教室
指導　和田　武雄教授
佐藤勝巳　村山章史　工藤雅之

教室の胃液分泌能に関する研究に平行して胃カメラを使用してきたので，胃カメラ所見と胃分泌能との関係について報告する。

対象例は多数例の中から確信を下し得た，胃癌13例，胃潰瘍26例，原発性慢性胃炎47例，正常11例を選択した。

胃液試料は教室在来の Insulin 静注法によって得た胃液の量，遊離塩酸々度及び既報したDPA反応を測定した。

1) 胃癌13例では低酸無酸が10例（76%）で多くは随伴性胃炎を伴ない，分泌量は70～80%であった。

2) 胃潰瘍26例では25例（96%）が過酸，正酸で随伴性胃炎の有無と酸度との間には特別の関係は認められず分泌量は60分目にかけて長く分泌上昇傾向が認められた。

3) 慢性胃炎について

① 表層性胃炎10例では5例（50%）が低酸，無酸で分泌量は正常の80%であった。

② 表層性萎縮性胃炎12例では6例（50%）が正酸以上で分泌量は正常の70%であった。

③ 萎縮性胃炎14例では低酸，無酸が8例（57%）で分泌量は正常の約60%で40分目に最多分泌量を示す例が多かった。

④ 萎縮性過形成性胃炎2例では共に正酸以上を示し，分泌量も正常であった。

⑤ 肥厚性胃炎5例では全例正酸以上を示し，分泌量もほぼ正常であった。DPA反応は胃癌では全例陽性，他の胃疾患では全例陰性であった。

以上の成績から臨床的に胃分泌機能を判断する際の診断根拠には，特に慢性胃炎ではX線検査上所見に欠ける恨みがあったが今回之をカメラ所見と対比しつつ確認検討した結果，遊離塩酸については大体従来の報告に一致した。

胃液分泌曲線では癌，萎縮性胃炎で減少傾向を認め，その他の胃炎及び胃潰瘍では正常或は増加の傾向を認めた。この曲線については各種胃疾患における Vagus の Insulin に対する感受性の問題，Vagalstimulation を受ける壁細胞の分布の相違，細胞そのものの機能の問題を考えるとき，一概に結論を出すことは困難であるが各胃疾患における胃分泌能の一つの傾向を見出し得たものと考える。

4. 慢性胃炎及び胃潰瘍に対する Azunol の治療効果

—主としてガストロカメラによる経過の観察—

北大第三内科学教室（主任高杉年雄教授）
並木正義　寺田秀夫　前鼻三雄
坂野輝夫　山寺泰彦　柴田祐次

ある種の胃疾患に対する薬物療法の効果判定にあたって，内視鏡的観察の重要なことは言をまたない。

今回私共は慢性胃炎患者16例，胃潰瘍患者6例の計22例に Azunol 錠を使用し，ガストロカメラによる経過の観察を主体としてその治療効果を検討したので報告する。

Azunol 錠は1錠中水溶性 Guajazulen（1, 4-Dimethyl-7-isopropylazulen）誘導体2mg を含有しており，日本新薬株式会社で試製されたものである。

その投与にあたっては通常1回½～1錠をコップ半杯（約100cc）の白湯にとかし，症状に応じて1日2～4回服用せしめ，且つ Rollkur（回転療法）を行った。即ち服用後5分間ずつ背臥→左側臥→腹臥→右側臥位と計20分間にわたり身体を回転させ，薬剤溶液を十分にしかも胃粘膜に平等に触れさせるようにした。投与期間は平均4週間前後であるが，症例によっては1ケ月以上2ケ月間にわたるものもある。本剤の使用結果を要約すれば

1） 自覚症状のすみやかな改善がみられ，とくに疼痛，食思不振に対する効果は顕著なものがあった。

2） 自覚症状の改善がみられたものでは，ガストロカメラ所見に於てもまたそれに対応した胃粘膜所見の改善がみられた。

3） 胃液酸度は過酸，低酸ともに正常化を示す傾向がみられた。

4） 特にのべるような副作用は殆んどなかった。

本剤のように特別な副作用もなく，また胃液酸度の高い低いをあまり気にせずに使用しうる薬剤は慢性胃炎等の経過の長い胃疾患の治療にあたって甚だ好都合なものであると考えられる。

なお胃疾患に対する薬剤の効果を内視鏡的に観察することが意味あるものであることの認識を深めた。